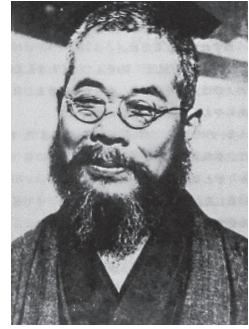


郷土の先人 喜田貞吉博士② (榊刈町)



徳島が生んだ日本歴史学の偉人、部落史研究の先駆者喜田貞吉博士は、実践的な学者でもありました。郷里における祭祀紛争の調停や企業による雇用問題解決などは、今もエピソードとして語り告がれています。

差別した企業側の雇用問題を取り上げて訴えました。いわゆる企業が誘致されても、被差別部落の人々は採用されないという深刻な問題でした。

その話を聞くと、喜田博士は直ちに村役代表5人と関係会社を訪問。幹部と2時間余り対話してその不合理性を反省させ、5人の採用と今後の善処を約束させました。当時は全国的に経済的不況で、特に農漁村においてはその荒波を厳しく受けていた時代であっただけに、村民が大企業に就職できたということは、画期的なことであり、大きな前進でありました。

喜田博士は帰郷のたびに、立江町主催文化講演会や榊刈敬義会、立江寺夏期大学などの社会教育講座での講演活動を重ねて、郷里の教育風土を高めていきました。

喜田博士の研究は、見せかけだけの差別解消で終わることなく、真の意味で差別をなくすにはどうすればよいのかというものでした。今の私たちにどうも啓発的な問いかけになっています。

1939 (昭和14)年7月、喜田博士は69才の生涯を閉じます。父母のもとでも眠りた

【雇用問題解決】

1925 (大正14)年8月、部落差別実態調査に訪れた喜田博士に対して、郷里の村役代表は当時の部落の人々を著しく

1925 (大正14)年8月、部落差別実態調査に訪れた喜田博士に対して、郷里の村役代表は当時の部落の人々を著しく

1925 (大正14)年8月、部落差別実態調査に訪れた喜田博士に対して、郷里の村役代表は当時の部落の人々を著しく

いとの希望に従い、郷里での葬儀には解放運動に携わる人々が全国各地から参列。水平社は全権委員を派遣。8月1日付発行の機関紙『全水ニュース』には、「ああ喜田博士」と題した悲報を載せ、「今はなき喜田博士は、我らの運動に勇気と希望を与えてくれた」と弔辞を掲げています。

喜田博士は、「法隆寺再建論」「南北朝並立論」など、真理の探求には極めて旺盛な意欲をもたれるとともに、歴史学者として初めて部落問題を学問的に解明するなど、「正しいものは正しい」と自説を主張され、学問のため民衆のために闘い抜かれた実践の人でした。また、恩師樋口健三先生を敬慕し、その師弟愛は生涯を通して貫かれています。1933 (昭和8)年、樋口先生のために八幡神社境内に記念碑が建立されました。記念碑の碑文「志存濟物」は喜田博士の作です。

市教育委員会生涯学習課 人権教育推進室 教育庁舎2階

☎ 32・3814 FAX 33・1230 jinkenkyouiku@city.komatsushima.tokushima.jp

市民文芸 花みずき歌壇 (422) 山崎泰子・選

蜘蛛の巣に落ち葉とらわれ宙に浮き地に着くまでの旅は終わらず

前原町 福元 英夫

それそれのいのちのままにせめぎあう我らに乗せて地球はまわる

小松島町 萬宮千鶴子

夫と来しこの坂道のその先を照らせる朝は新しき年

松島町 萬野 行子

とりとめもなき雑談を交わしつつチャージをしたる明日への元氣

松島町 六田 靖子

少しずつレジンの液を流しこみ型どりをして作る寶石

小松島町 綴木 茂治

力餅踏んぱり背負う一歳の吾子が笑顔で「かーかん」と呼ぶ

日開野町 森 理子

懐かしや菓立ちの港小松島 今もこころにドラの音ひびく

田浦町 岩田 泰一

庭走る蜥蜴をシユツとつかみ取る 八歳孫の所作のすがしき

中田町 湯浅 百世

大晦日若き歌声ついてけず除夜の音を聞くテレビ難民

横須町 天王谷 一

現し世に賜り汚れなきものの一に淡く虹のかかれり

中田町 松並 敦子